

# 川端文学における美の世界について

竹 本 博 子

## はじめに

春は花夏ほととぎす秋は月

冬雪さえて冷しかりけり

これは「美しい日本の私―その序説」と題して行なわれたノーベル賞受賞記念講演の冒頭に引用されている道元禪師の歌である。そして川端康成は、

雪の美しいのを見るにつけ、月の美しいのを見るにつけ、つまり四季折り折りの美に自分が触れ目覚める時、美にめぐりあふ幸ひを得た時には、親しい友が切に思はれ、このよるこびを共にしたいと願ふ、美の感動が人なつかしい思ひやりを強く誘ひ出すのです。

この「友」は広く「人間」ともとれませう。また、「雪・月・花」といふ四季の移りの折り折りの美を現はす言葉は、日本においては山川草木、森羅万象、自然のすべて、そして人間感情をも含めての、美を現はす言葉とするのが伝統なのであります。

と解説を加えている。「雪・月・花」というすばらしい四季を持つ「美しい日本の私」は、その「美」に触れる時こそ、「人間」の思いやりという情念の世界を創造しようと言うのである。川端は、さ

りげなく自然の美を描写しながらも、自然の美という外在的な美を超越し、実は人間の心底に根ざす虚空の美を語ろうとしているのである。

例えば、彼の代表作とされている『雪国』の冒頭に述べられているのは「雪」の美しさであるが、その「雪」の清潔さ透明さに繊細なる人間の心理を絡ませ、一つの物語を織りなしている。

また、『古都』などは、それが端的に表現された作品であると言っても過言ではないだろう。近代化の波に乗りながらも、古い伝統を保持しつつづける古都、京都を舞台に、葵祭、時代祭、祇園祭と年中行事絵巻を繰り広げ、「春の花」から「冬の花」に至るまでの四季の美しさを背景に二人の姉妹の心の交錯を描き上げている。このことについては山本健吉氏も、

これはある意味では、地理的・風土的小説と言ってもよい。そして作者は美しいヒロインを、あるいはヒロイン姉妹を描こうとしたのか、京都の風物を描こうとしたのかどちらが主でどちらが従か、実はよく分らないのだ。

この美しい一卵生双生児の姉妹の交わりがたい運命を描くのに、京都の風土が必要だったのか。あるいは逆に、京都の風土、風物の引立て役としてこの二人の姉妹はあるのか。私の考えは

どちらかという、後者の方に傾いている。

と述べているように、自然と人間がほぼ一体となっていることがわかる。

では、川端康成の言う「雪・月・花の美」「よるこびを共にした」と願ふ美の感動」とは、言いかえるならば、川端文学における『美』とはいったい何であろう。

川端文学の美の世界を探究するにあたって、私は、『伊豆の踊子』『雪国』『眠れる美女』の三作を選び、まずそれぞれの「美しい」ということを抜き出す作業を試みた。その結果、『雪国』における駒子と葉子との対比に興味深い結果がみられたので、それを中心に『伊豆の踊子』から『眠れる美女』に至るまでの美意識とその形象の変化を探り、さらに三島美雪と比較することによって、川端美雪の特質を考察してみたいと思う。

## 第一章 『雪国』における駒子と葉子の比較

『雪国』の人物の配置を考えるとき、主人公は誰かという困難な問題が生じるが、『美』の対象として造られている人物を考える場合には、島村よりも駒子と葉子という二人の女性の方が重要であろう。そこで、この二人の女性を比較することによって、川端康成の描いた女性像、そしてその背後にある彼の美意識を分析してみたいと思う。

まず、駒子と葉子について用いられている「美しい」ということを抜き出し、それぞれに分類して書き出してみよう。( )内には「美しい」とした対象物を示した。

### △駒子▽

○はじめからだこの女がほしただけだ。それを例によつて遠廻りしてゐたのだと、島村ははつきり知ると、自分が厭になる一方女がよけい美しく見えて来た。(女)

○細く高い鼻が少し寂しいけれども、その下に小さくつぼんだ唇はまことに美しい。蛙の輪のやうに伸び縮みがなめらかで……(唇)

○その雪のなかに女の真赤な頬が浮んでゐる。なんともいへぬ清潔な美しさであつた。(頬)

○あの美しく血の滑らかな唇は、小さくつぼめた時も、そこに映る光をぬめぬめ動かしてゐるやうで、そのくせ唄につれて大きく開いても、また可憐に直ぐ縮まるといふ風に、彼女の体の魅力そっくりであつた。(唇)

○駒子の唇は美しい。蛙の輪のやうに滑らかであつた。(唇)

○駒子の愛情は彼に向けられたものであるにもかかはらず、それを美しい徒勞であるかのやうに思ふ彼自身の虚しさがあつて……(徒勞)

### △葉子▽

○「駅長さん、弟をよく見てやつて、お願ひです。」悲しいほど美しい声であつた。高い響きのまま夜の雪から木魂して来さうだつた。(声)

○娘の片眼だけは反つて異様に美しかつたものの……(眼)

○彼女等が汽車に乗り込んだ時、なにか涼しく刺すやうな娘の美しさに驚いて目を伏せる途端……(娘)

○殊に娘の顔のただなかに野山のともし火がともつた時には、島村はなんともいへぬ美しさに胸が顫へたほどだつた。

(娘の顔)

○小さい瞳のまはりをぼうつと明るくしながら、つまり娘の眼と火とが重なつた瞬間、彼女の眼は夕闇の波間に浮ぶ妖しく美しい夜光虫であつた。

(眼)

○葉子の美しい顔はやはり写つてみたけれども……

(顔)

○「駒ちゃん、これを跨いぢやいけないの？」

(声)

澄み上つて悲しいほど美しい声だつた。

○なぜならば、汽車の窓ガラスに写る葉子の顔を眺めてゐるうちに、野山のともし火がその彼女の顔の向うを流れ去り、ともし火と瞳とが重なつて、ぼうつと明るくなつた時、島村はなんともいへぬ美しさに胸が顫えた……

(ともし火と重なつた瞳)

○「駒ちゃん、駒ちゃん」と、低くても澄み通る、あの葉子の美しい呼び声が聞えた。

(声)

○葉子の悲しいほど美しい声は、どこか雪の山から今にも木魂して来さうに、島村の耳に残つてゐた。

(声)

○聞えもせぬ遠い船の人を呼ぶやうな、悲しいほど美しい声であつた。

(声)

○客がたてこむと、炊事場の女中達の声も大きくなるのだが、葉子のあの美しい声は聞えなかつた。

(声)

○葉子はその刺すやうに美しい目で、島村をちらつと見た。

(目)

○「あら、お行儀の悪い、いやだわ。」と、その声が驚くほど美しく

つた。

(声)

○葉子は言葉尻が美しく吊り上るやうに言つて、島村を見つめたまま……

(言葉尻)

○葉子はその刺すやうに美しい目をつぶつてゐた。

(目)

二人の女性のうち、島村が直接交渉を持つのは駒子であり、人物造形という点から見れば、作者は駒子の方に多く筆を費しているが駒子について「美しい」ということばを用いている箇所は六箇所にすぎず、葉子に対して用いている箇所は、意外にも十六箇所もあり、駒子のそれに対して、倍以上もの数値を示している。また、駒子、葉子以外の自然描写等について「美しい」ということばを用いた箇所は五箇所ほど見られた。これらの自然美は、駒子、葉子という人間の美と融合したものであるが、駒子と葉子の比較に直接の関係は見られないので、ここでは省略する。

では、この駒子と葉子を描写するのに用いられた「美しい」ということばの頻度数は、いったい何を意味するのであろうか。この数値が示す通り葉子の方が駒子よりも「美しい」と言うことになるのであろうか。

その結論を出す前に、駒子を描写するのに「清潔」ということばが案外多く用いられている点にふれておこう。このことばも「美しい」と同様、駒子像を推察するのになりに重要な手がかりになると思われるので、もう一つの鍵として、「清潔」ということばを用いて駒子を描写している部分を抜き出してみることにする。

△駒子▽

○女の印象は不思議なくらゐる清潔であつた。

○彼女は清潔すぎた。

○七日間の山の健康を簡単に洗濯しようかと思ひついたのも実は初めにこの清潔な女を見たからだつたらうかと……

○首のつけ根もまだ肉づいてゐないから美人といふよりもなによりも、清潔だつた。

○その雪のなかに女の真赤な頬が浮んでゐる。なんともいへぬ清潔な美しさであつた。

○駒子は清潔に微笑んでゐた。

○百合か玉葱みたいな球根を剥いた新しさの皮膚は、首までほんのり血の色が上つてゐて、なによりも清潔だつた。

○駒子は清潔に坐つてゐて……

○駒子の肌は洗ひ立てのやうに清潔で、島村のふとした言葉もあんな風に聞きちがへねばならぬ女とは到底思へないところに、反つて逆らひ難い悲しみがあるかと思へた。

以上のように駒子の描写に用いられているものは、「美しい」ということば六箇所に対して、「清潔」ということばは九箇所もある。島村は、彼女の印象を「女の印象は不思議なくらゐ清潔であつた。足指の裏の窪みまできれいであらうと思はれた。山々の初夏を見て来た自分の眼のせるかと、島村は疑つたほどだつた。」と駒子を新緑の山から来る心象と重ねている。そしてその新緑の清潔さは、やがて季節の移りかわりと共に白雪の清潔さへと変化して行く。

ここで注目すべきことは、清纯そのものに描かれている葉子には「清潔」ということは全く用いられておらず、「美しい」という抽象的なことばだけで描写しているということである。このことから「清潔な女」と表現されている駒子は葉子よりも具象性を持つ現実

的な人物と言えるだろう。

次に、駒子について用いられた「美しい」ということばが彼女たちの何を「美しい」としているのかという点、駒子について「美しい」と述べたのは「唇」、葉子については「声」が圧倒的に多く、各々半数以上をしめているのである。この「唇」「声」については川端文学特有のエロティシズムが感じられる。このエロティシズムも彼の美学を考える際に重要な意味を持つものと思われる。

駒子の「美しい唇」に比して、葉子の「美しい声」は、その瞬間に消えさるものであり、島村の手の届かぬもので、葉子像は抽象性を帯びてくる。だが、葉子のそのきわめて抽象的な「美しさ」は、繊細な感覚的用語で修飾されることによって、わずかに具体化されている。

例えば、

○悲しいほど美しい……

○異様に美しかった。

○なにか涼しく刺すやうな美しさ……

○妖しく美しい

○あの刺すやうに美しい

○驚くほど美しかった。

などである。駒子に対して清潔さを感じさせた白雪は、葉子に及んでは、「悲しいほど」「異様な」「涼しく刺すやうな」「妖しい」といった実体の不分明な水の冷たさ、鋭さを感じさせる。

また、

「島村が葉子を長い間盗見しながら彼女に悪いといふことを忘れてゐたのは、夕景色の鏡の非現実な力にとらへられてゐたか

らだつたらう。」

「夕暮の汽車の窓ガラスに写る女の顔のやうに非現実な見方をしてゐたのかもしれない。」

と云うやうに葉子の姿を肖像として見るのではなく、その姿を一旦、夕景色の鏡の中に写し出し、葉子を非現実的な虚像としてとらえることによつて、その幻想の美に自ら陶醉しているのである。そして、島村はあたかも葉子を現実の女として見ることを恐れているかのように彼女を決して近づけようとしない。

葉子は今に体まで顫へて来さうに見えた。危険な輝きが迫つて来るやうな顔から島村は目をそらせて笑ひながら、

「早く東京へ帰つた方がいいかもしれないんだけれどね。」

(中略)

さう言つて、氣のゆるみか、少し濡れた目で彼を見上げた葉子に、島村は奇怪な魅力を感じると、どうしてか反つて、駒子に対する愛情が荒々しく燃えて来るやうであつた。為体の知れない娘と軋落ちのやうに帰つてしまふことは、駒子への激しい謝罪の方法であるかとも思はれた。またなにかしら刑罰のやうでもあつた。

彼は駒子とは異なる「奇怪な魅力」を葉子に感じている。その「奇怪な魅力」とは、何であらうか。また、駒子と葉子の相違はどこにあるのだらうか。

二人の女性の決定的な相違は「現実の女」と「非現実の女」とにある。言うまでもなく前者が駒子であり、後者が葉子である。駒子が「現実の女」であるからこそ、徒勞と知りつつも強く生き抜こうとする女の『美』、つまり彼女の精神の内部をのぞくことによつて

鋭く『美』を追究しようとしている。しかし、葉子に対しては、殊更それを敬遠しているかのように彼女の内面には立ち入ろうとしない。

このように、二人の女は作者によつて創造された美的対象であるが、駒子はあくまでも清潔な「現実の女」であり、葉子は「雪中火事」におけるはかない命を予期するかのとき「非現実の幻」で、その謎は秘密のベールに包まれたまま永遠のものになるのである。だから、その幻の抽象性、夢想性、神秘性を描写するために「美しい」ということばを多く用いたのではないだらうか。確かに葉子の抽象性はこの「美しい」ということばの類出によつて形成されていると言えよう。

あくまでも、この作品における中心人物は駒子である。しかし、作者が秘かに憧憬を抱きつづけていた美的対象は、「美しい」ということばの数値が示す通り、葉子ではないかと思われる。島村と直接交渉もあり「現実」に生きている女として描かれている駒子と、決して手に入れることのできない抽象的であるがゆえに永遠の『美』を持つ葉子は、作者の配慮によつて鮮烈に対比的に描き分けられている。

しかし、この両者に与えられている基本的な条件があることを忘れてはならないだらう。それは、すでに言われていることではあるが、いくら駒子が「現実の女」であると言つても、その「現実」はトンネルを抜けた雪国という「非現実」の世界での「現実」なのであり、それらの『美』は仮構された世界にのみ存在する虚無とも言うべき『美』だと言ふことである。

トンネルを通過することによつて、日常から非日常へと、島村は

無意識のうちに旅情の世界に誘導されて行く。日常世界において徒勞に身をまかせていた島村の心はトンネルの間に入った瞬間一時停止し、非日常の世界に出ると、彼の心は生き生きとして動き始める。川端文学における日常と非日常の光の世界には、明度の差を鮮明に感じとることができる。もちろん、後者の明度の方がはるかに高いことは言うまでもない。

島村は、このようにトンネルを通過して雪国を訪れ、彼の心底にその雪と女たちの美しさを刻み込み、またあのトンネルを抜けて日常へともどって行くのである。日常の世界に帰れば、駒子も葉子と等しく非現実の存在となるのである。

## 第二章 『伊豆の踊子』における踊子像

以上、『雪国』に登場する駒子と葉子という二人の女性について考察したが、川端文学の全貌をみるため、『雪国』以前と以後とを通過して、美意識の変化を考察してみたい。まず『雪国』以前の作品を代表するものとして、『伊豆の踊子』をとりあげよう。

この作品においても、踊子に対して用いられた「美しい」ということばを抜き出してみることにする。

### △踊子▽

○私には分らない古風の不思議な形に大きく髪を結つてゐた。それが卵形の凜凜しい顔を非常に小さく見せながらも美しく調和してゐた。

(髪)

○大島と聞くと私は一層詩を感じて、また踊子の美しい髪を眺めた。

(髪)

○不思議な程美しい黒髪が私の胸に触れさうになつた。

(髪)

○この美しく光る黒眼がちの大きい眼は踊子の一番美しい持ちものだつた。

(眼)

○踊子は大鼓を打つ時の美しい手真似をしてみた。

(手真似)

作品中に用いられた「美しい」ということばは六箇所で、そのうちの半数が踊子の髪についてであり、その他、眼、しぐさを「美しい」としている。しかし、それは踊子の外見的な「美しさ」の観察のみであつて、『雪国』における駒子の場合のような内面的な「美しさ」には到達しておらず、また葉子の場合のような抽象化された神秘性、幻想性に通ずるものとも趣きを異にする。このように△私▽の踊子に対する『美』の追究が黒髪、眼、手真似など外見的な初々しい「美しさ」を表現するにとどまっているということは、△私▽がまだ若い学生であり、旅情によってかき立てられた異性に對する憧憬という淡い感情のみで踊子に接しているからであらう。

△私▽の踊子への『美』の追究は、あまりにぎこちなく、『雪国』における島村ほどの円熟した『美』の追究テクニクはない。しかし、そのぎこちなさゆえの未完成の『美』が不思議にも完成されており、踊子の黒髪、眼、しぐさに、我々は、駒子、葉子の前身の姿を思い描かずにはいられない。

三島由紀夫氏は、この未完成の『美』についてこう書いている。

これらの静的な、また動的なデッサンによつて的確に組み立てられた処女の内面は、一切読者の想像に委ねられている。川端氏はこの「処女の主題」のおかげで、氏の同時代の作家が悉く

陥った浅はかな似非近代的心理主義の感染を免かれるのである。世間ではこれを抒情というが、『伊豆の踊子』の終局に見られる「甘い快さ」がどうして抒情であろうか。これはむしろ反抒情的なものだ。まるでこの見事な著書の小説は、「甘い快さ」だけではこのような作品が成立しないことの証明として書かれたようなものだからだ。若書と私は言った。『伊豆の踊子』は日本の作家が滅多にもたない若さそれ自体の未完成の美をもっているが故に、(もし若書という言葉に善い意味がつけられるものならば)、決して作品の未完成を意味しない真の若書ともいべきものだ。

未完成の『美』の完結の条件として、△私Ⅴの踊子に対する思慕は意識的に憧憬の状態にとどまらされており、その憧憬こそ初恋の哀歎、そして別離へとつながるものである。

そのことは、誰よりも作者が悟っており、下田港での踊子との別れの時も、△私Ⅴは別れのつらさを感じるといふよりも、「私は何も考えてゐなかつた。ただ清々しい満足の中に静かに眠つてゐるやうだつた。」「私にはどんな親切にされても、それを大変自然に受け入れられるやうな美しい空虚な気持ちだつた。」「頭が澄んだ水になつてしまつてゐて、それがぼろぼろ零れ、その後には何も残らないやうな甘い快さだつた。」という非日常世界における思い出の満足感に素直にひたり、その思い出によって浄化された気持ちを率直に「美しい空虚な気持ち」と表現し、「甘い快さ」と感じているのである。だが、その「甘い快さ」は、単なる甘美さのみには決してとどまることのない青春の哀歎がこめられているというところを見のがしてはならない。

また、この「美しい空虚な気持ち」こそ、美学者川端が終生求めつづけた『美』の極致なのではあるまいか。「伊豆の踊子」にはそれを誘発した「美しさ」が原初的な形で認められると言えよう。そこから、虚無の美学者と称される川端の『美』の世界が底知れず深まって行くのである。

### 第三章 『眠れる美女』における少女について

『眠れる美女』は、死神と生との対話ともいふべきすさまじい作品である。その動機も構想も抽象的なのだが、驚くべき現実性をもった対象物をつくりあげた。六人の娘についての叙述は単に造形的なだけでなく、色彩、体温、うるおい、しめり、感触などのすべてを含んでおり、しかもそれらは人間のあつかひかた、つまりは、生への郷愁だけを書いたものを私は世界文学の中でも知らない。この作品の思いを向けるものもともと人間関係を越えた世界であることの究極的な帰結である。

これは、手塚富雄氏の『眠れる美女』評である。

『伊豆の踊子』における△私Ⅴ、雪国』における島村と『美』を唯一の餌として成長して来た一人の男は、江口老人と化して、踊子、駒子、葉子に実現することのできなかつた夢を眠れる美女という常識をはるかに超えた仮構の少女たちに求めたのである。

『眠れる美女』を考察するために、前と同様にして「美しい」ということばを抜き出し、そのうちの幾例かをあげてみた。

○人間の女の乳房の形だけがあらゆる動物のうちで長い歴史を語るうちになぜ美しい形になつて来たのだらうかと……

(人間の女の乳房の形)

○娘が美しく眠りきつてゐる。

(娘の眠り)

○末娘は若妻の花が咲いたやうに美しくなつて来た。

(末娘)

○白い娘のはだかほかがかやく美しさに横たわつてゐた。

(娘のはだか)

以下、「美しい」ということばは全部で十九箇所みることができた。そのうち、十七箇所が眠っている美女たちに対して用いられており、『雪国』で考察したように「美しい」ということばが最も多く使われていた葉子が幻想美の極地であるとするならば、この場合、美女たちがそれに匹敵し、この作品における『美』の意識は、そこに存在するであろうと思われる。

しかし、美女たちはあくまで眠っており、その「美しさ」は用例からもわかるように、美女たちの外面的な美しさのみであり、その外面的な美しさには、やはり踊子の場合と同様、駒子のような内面性は感受できない。

処女であり、その「美しさ」において初々しい表面的なもののみで、内面が描かれていないという点については踊子に共通し、その肉体が江口老人の掌に委ねられるという点については駒子に相当し、その人物が幻想的、神秘的であるという点については葉子と相通じるものを持つのである。換言すれば、作者は、踊子において異性に対する淡い思慕を抱くことによつて、その中に初めて『美しいもの』を掘り当て、駒子、葉子にそれを分化、発展させ、さらに眠れる美女達の初々しい肉体の中に、踊子、駒子、葉子の三者を総合した『美』を追究したのではないだろうか。

『雪国』においては、その日常と非日常との境界として「トンネ

ル」があったが、『眠れる美女』においては、その「眠れる美女の館」の密室へ通じる杉戸と、その密室を確乎たる密室にする鍵がそれに相当する。その確乎たる密室において決して目覚めることがなく、裸体のまま昏々と眠らされた不思議な美女と一夜をともにするということは、死期の迫る老人が「生」を感じることでできる最大の贅沢な遊戯なのである。

しかし、その「生」はかつて自分が生きたという過去の「生」であり、老人は「眠れる美女」と夜を過こすたびに過去の「生」、過去の女を一人一人思い出すのである。その過去の幻を追うという老人の所業がいかに空しく、「老いのみにくさ」「老いのなさけなさ」を痛感するものであるかは、作者自身、充分承知している。にもかかわらず江口老人は、幻影を求めて二夜、三夜とその不思議な館に通わずにはいられなくなる。

彼をこの館に誘う最大の原因は、眠れる美女たちの美しさと彼女たちによつて導かれる生も死もない第二の空間に眠る「無」の快感ではないだろうか。

彼女たちの初々しさには、踊子の印象があるが、虚無感を味わうという点では、むしろ『禽獣』における千花子が生を放棄した時の姿を思わせる。死を選び、無心に目を閉じ、合掌する千花子に「虚無のありがたさ」を痛感する。この「虚無のありがたさ」こそ江口老人が「眠れる美女」の館に求めていた幻影ではないだろうか。その「虚無のありがたさ」については、三好行雄氏が次のように語っている。

身を売りながら愛の意味を知らぬ千花子、人まかせの死をえらぶ千花子、化粧の顔を他人にゆだねている千花子、この三様の



姿態はあきらかにひとつの心象風景のなかにある。その風景は無限の許容をふくみながら、すべての感傷と恩愛を拒否する。

千花子は△末期の眼▽によつても、のび変えられた女である。そして、虚無のありがたさという説明ぬきの唐突な観念は、その荒寥とした世界の美を語ることばでもあろう。精神に死を命じ、思うことをやめた人間の無償の美しさと呼びかえてもいい。かれが感動したのは、まさに死のうとする人間の美しさではなく、死にむかつて自己を放下した人間の美しさである。諦念でも断念でもない、はじめから自己を無の位相にただよわせた放棄の姿勢である。かれの△末期の眼▽は千花子をその究極の場所に追いつめて、彼女の美を讃美する。

眼れる美女達は、決して千花子のように、「死にむかつて自己を放下」してゐるのではないが、館の主人や老人達によつて眠らざれ人工的にその状態に置かれており、実質的には、江口老人が「虚無のありがたさ」を感じられる状態にある。たとえそれが人工的であるにせよ、川端は彼独自の方法で『美』を追究する。『眠れる美女』における美女たちの「美しさ」は非情の『美』とも思える。美女たちを美しく、初々しく描写すればするほど、その対極とされる老人たちの「老いのむなしさ」の輪郭は明瞭になり、老人たちの『美』への悲願さえ感じられるのである。

#### 第四章 川端美学と三島美学との比較

以上、川端の三作を追つて美意識とその形象の特質について考察してきたが、ここに川端の後輩にあたり、独自の美学を構築したと言われている三島由紀夫の代表作『金閣寺』をとりあげて、今まで

川端の作品で行なつて来たと同様に「美しい」ということばを抜き出し、川端美学との共通点、相違点を考察してみたいと思う。

まず、用例を幾つかあげてみよう。

○金閣ほど美しいものは地上になく……

○どうあつても金閣は美しくなければならなかった。

○あれほど失望を与えた金閣も、安岡へかえつたのちに日に、私の心の中でまた美しさを蘇らせ、いつかは見る前よりもっと美しい金閣になった。どこが美しいということはできなかった。

○私の心像の金閣よりも本物のほうが、はつきり美しく見えるようにしてくれ。又もし、あなたが地上で比べるものがないほど美しいなら何故それほど美しいのか、何故美しくあらねばならないかを語ってくれ。

ここに書き出したものは、△金閣▽について「美しい」と述べられたもののうちの一部であるが、この作品中「美しい」ということばを全部抜き出してみると、何と合計六十箇所にものぼつた。そのうち△金閣▽に関するものが二十三箇所、△人物▽に関するものが十四箇所、△その他▽が二十三箇所となり、この数値からも、三島の作品中における『美』への異常なほどの関心度を推察することができる。

次に、この「美しい」ということばを比較してみると、△金閣▽に関する「美しい」にはそれを具体化する修飾語がほとんど見られないのに比して、△人物▽並びに△その他▽のものには比較的多く見られる。例えば、柏木の蒼ざめた顔を「険しい美しさ」と言った

り、肉体上の不具者を「不敵な美しさ」と言ったり、短剣を「抒情的な美しさ」と言ったり、また、有為子の裏切りを「澄明な美しさ」等とそれぞれ「険しい」「不敵な」「抒情的な」「澄明な」といった修飾語で具体化している。

このことは、△金閣▽は、『美』の対象としての具体化のための修飾語を必要とせず、「金閣ほど美しいものは地上になく」「どうあっても金閣は美しくなければならなかった。」という、言ってみれば絶対と称すべき『美』が与えられているからである。また、現実には、「金閣はもはや不動の建築ではなかった」時、はじめて観念の中に比類のない『美』が確立したのである。そこにおいて、

「どうあっても金閣は美しくなければならなかった。」  
という『美』の必然と同時に、

「人がこの建物にどんな言葉で語りかけても美しい金閣は無言で、繊細な構造をあらわにして周囲の闇に耐えていなければならぬ。」

「池のおもてにたゆたう莫大な官能の力が、金閣を築く隠れた力の源泉であったのだが、その力が完全に秩序立てられ、美しい三層を成したあとでは、もうそこに住むことに耐えられなくなって、瀬清をつたわってふたたび池の上へ、無限の官能のたゆたいの中へ、その故郷へと、遁れ去ってゆくほかはなかったのだ。」

という『美』の宿命を担ったものなのである。その△金閣▽の絶対美は幻想ということばで表現するには、あまりにも明確な存在であり、また具体化するには、あまりにも捕えがたい存在である。

三島と川端の『美』は、現実をはるかに超越した次元にあり、と

ぎすまされた透明な冷たさを内在させている幻想的なものであるという点において共通している。例えば、『伊豆の踊子』にしろ『雪国』にしろ、もと来た「トンネル」を抜けて現実の世界にもどる時には、踊子や駒子たちと別れねばならない運命にあるし、また、△金閣▽にしても、不朽のものとするには放火する以外方法はなく、結局は決して自らの手に委ねることはできないという条件のもとにある幻夢でしかない。そして、それが幻夢である以上、そこには虚無がつきまとい、その『美』は刹那的な様相を呈することになる。

ここで今一つ着眼すべき共通点がある。それは、これらの『美』は主人公（『伊豆の踊子』における私、『雪国』における島村、『眠れる美女』における江口老人、『金閣寺』における私）の目を媒介としてのみ自然も人間も「美しい」ということである。つまり、両者の『美』は主人公の目なくして「美しく」あり得ず、それは単に「きれい」という段階にとどまってしまふものなのである。

しかし、両者はすべての点において共通しているのではない。三島の方には、人物など「美しい」ということばが与えられているものの上に△金閣▽という絶対の『美』が君臨しており、その『美』は宿命とされている。そして、その『美』の構築の方法は非常に論理的である。

川端においては、三島の絶対美に相当するものとして、『雪国』に見られた葉子の『美』がそれに当たるとも思えるが、それはあくまでも感覚的、幻想的な『美』である。その『美』のほとんどが、川端独自の官能で官能をそのまま書き表わし、その官能と官能の交錯した接点を「美しい」としている。また、三島の文体が力強く論理的で男性的であるのに対して、川端のそれは、感覚的、流動的で

女性的な色彩が濃い。

## おわりに

『伊豆の踊子』『雪国』『眠れる美女』の「美しい」ということは手がかりに、川端文学における『美』の世界を考察し、三島の『金閣寺』との比較によってその特質を明らかにしようとした。このような作業を終えた今、再び客観的に川端文学の『美』の特質を見つめなおしてみると、彼のほとんどの作品の美的対象は、これまでの考察通り、そこに登場する女性達に集中していると言える。

彼女たちは、川端独自の観察方法で、神秘的に、あるいは幻想的に創造され、彼女たちの『美』は、人間の『美』から、女の『美』へそして、いつしかその『美』は自然の『美』へと変化して行くのである。そして、作品を読み終えた読者に、「雪・月・花」などという単なる外在物であるはずの自然の『美』が、実は、それが人間の『美』と一体となった不思議な川端の『美』の世界であることを感じさせる。しかし、その『美』は、あくまでも社会という秩序を遠く隔離した虚構の世界にのみ存在するのであり、そして、その虚構は、どうあろうとも虚構であり、そこには虚構であるがゆえの宿命として、虚空とも言うべき、むなしさ、はかなさを感じさせる。この虚空については『美しい日本の私—その序説』の末尾で川端康成みずから、「この虚空こそ禅に通じ、実は強く日本の四季の美に通じるものである。」と言っている。

『美』とは、生活も道徳もすべて断ち切られた生命と現象の原点、すなわち虚無の世界に存在し、それらは決して捕え得ぬものであり、その『美』は、その透明さと、決して捕え得ぬという必然に

おいて、他のいかなる具体物よりも、神秘的に、感覚的に、我々に感動を与えてくれるのである。

## 〔評〕

この論文を書き直しているとき川端康成の死が報ぜられて、竹本さんは、ひどく書きづらくなったと述懐していた。死の理由を忖度することのおこがましさを知らながらも、氏が死を決意したときは、やはり「禽獸」の△彼△のように、「虚無のありがたさ」を感じていたのだろうか、いやそれとも……といった思いを禁じたいのはやむをえないことである。

ことばの機能の分析による作品論は、作者の伝記的事実を意識的に排除することによって成立する。この論文は、「美しい」ということばをとり出すことによって、川端の美意識の特質を明らかにしようとした。文学、とりわけ、美の質を数量的な方法で測定することはいかにも場違いなことのように思えるが、その結果が、われわれの読みとりの印象と一致するとき、一つの有効な方法であったと納得できるのである。特に、「雪国」の、葉子と駒子の対比にきわだった成果を認めることができ、「眠れる美女」の少女たちを、踊子、駒子、葉子の発展としてとらえるのも興味深い。また、「金閣寺」との比較も、当を得たもので、川端の美の特質を明らかにするのに役立つ。

川端の美の世界の全貌をとらえるには、もっともっと多岐にわたる考察が必要であるが、この論文は、多くを望まず、一つの方法に限定したために、たしかな成果を得ることができたと見えよう。

(江後 寛士)